Abstract

明治30年代と〈始まり〉の「伊香保」

―― 徳冨蘆花『不如帰』における幸福の偽装

Shiho ANDOH(安藤史帆 : PhD student, The University of Tokyo, Graduate School of Arts and Sciences)
✉ stars_and_lilies@yahoo.co.jp

(日本)東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程。日本近代文学における温泉表象。「温泉場のポリティクス――末広鉄腸『政治小説　雪中梅』と箱根――」(『言語情報科学』(20), 2022)、「江見水蔭『女房殺し』における軍事の影――逗子と箱根に着目して――」(『言語情報科学』(21), 2023)。

The Turn of the Twentieth Century and Ikaho Hot Spring Placed at the Beginning

: The Fabricated Bliss in Tokutomi Roka's *Hototogisu*

This paper reappraises Tokutomi Roka's *Hototogisu*, a work which was widely presented in a variety of media between the Meiji and Showa periods. Previous studies on this novel have paid attention to its melodramatic structure, which is based on the representation of the Zushi, and the depiction of Takeo reconciling with his late wife Namiko's father as marking "the end" (owari). However, the Shinpa versions, which were considered to be the most representative of various stage adaptations of *Hototogisu*, used the hot spring site of Ikaho as the setting for the opening act of the play, as in the original novel. Both the Shinpa adaptations and the original novel entail the link between the Ikaho hot spring and *Hototogisu*, in this way centering the portrayal of marital bliss. This is also emphasized in collected essays *Ikaho Miyage*. To elucidate the function of this bliss in the literary works of later generations, this paper revisits the centrality of Ikaho in the original novel while also considering the instability and multiplicity of the 1890s Japanese society from which it emerged. This focus reveals how the image of "hot springs" is conceptualized and the kind of linguistic network that is constructed in *Hototogisu*.

Keywords Tokutomi Roka(徳冨蘆花), *Hototogisu*(『不如帰』), Representation of Hot spring in Modern Japan(近代温泉表象), Topos(場[トポス]), The Meiji 30s(明治30年代)

1 場(トポス)の創出と明治30年代

徳冨蘆花『不如帰』(1898-1899)は世紀末に登場し、発表当初から人気を博してベストセラーとなった作品である[1]。本作は、当時流行していた家庭婦人を対象とする「家庭小説」の一つとして認識されるにとどまらず、知識階級から一般大衆に至る社会の各層にわたって広範囲に受容された[2]。さらに演劇(映画)などの受容を介して、そののちの時代においても長きにわたって揺るぎない人気を保ち続けることになる[3]。

本作のような「家庭小説」のジャンルに属する作品群は、従来「近代文学」の「圏外」とされる「通俗小説」として軽視されてきたが[4]、近年、「近代文学」の本流「自然主義」を準備する明治30年代の過渡期に登場したという点において捉え直しが図られている[5]。『不如帰』においては、小説ばかりではなく演劇や映画、あるいは口絵や絵葉書などアダプテーション作品群の分析などが進められ[6]、多様なメディアでの受容という観点を通して、読者、観客との関係構築の問題が掘り下げられることとなった。たとえば、関肇は、「家庭小説」というジャンルに括りこまれ、通俗的と見做されてきた作品の有り様を、新聞連載という初出発表形式や「メロドラマ」という様式から捉え直そうとした。また瀬崎圭二は、「メロドラマ」の「ドラマチック」な展開を支える場として「海辺」の舞台を重要視した。

『不如帰』に関する先行研究が、特に注視するのは〈終り〉である。「〈父〉を得て」「自己形成」するという山本芳明[7]、「〈自然〉にふんだんに恵まれた墓地」と「〈現実〉」とが対比されることで、青年と老人の「浄化」がもたらされるとする藤井淑禎[8]、義理の父と息子との和解に「日清戦争と台湾戦争との連続性」を読み取る高田知波[9]、同時代背景に応え「戦争と〈家〉とに翻弄された浪子の死」を男たちにとっての「意味ある死」に祭り上げるためのラストだとする高橋修[10]。高橋の論題にあるように、始終先行論の注目を集めるのは、浪子の墓前で義理の父と息子とが結束を誓い合う結末部分(〈終り〉)であったといえよう。先述した「メロドラマ」という観点を導入して読者や観客の受容の問題を解きほぐ

---

1 本稿における引用は徳冨蘆花『不如帰』(岩波書店, 2012)に拠るものとする。適宜旧字は新字に改め、ルビは必要と思われる箇所のみ記載し、その他は省略した。ブロック引用括弧内には章と頁数を記す。

2 伊狩章『硯友社と自然主義研究』(桜楓社, 1975), pp.64-74.

3 『不如帰』は、1909年2月には100版を重ね、昭和初期の段階で190版となっている。

4 瀬沼茂樹「家庭小説の展開」(『明治家庭小説集』明治文学全集93, 筑摩書房, 1969), pp.421-430.

5 小森陽一編『メディア・表象・イデオロギー――明治30年代の文化研究――』(小沢書店, 1997).

6 関肇『新聞小説の時代――メディア・読者・メロドラマ――』(新曜社, 2007), pp.88-146, 瀬崎圭二『海辺の恋と日本人――ひと夏の物語と近代――』(青弓社, 2013), pp.53-83.

7 山本芳明「ディスクールの世紀末〈父〉の肖像――徳冨蘆花『不如帰』――」(『国文学 解釈と教材の研究』40(11), 学燈社, 1995.9), pp.42-49.

8 藤井淑禎『不如帰の時代――水底の漱石と青年たち――』(名古屋大学出版会, 1990), pp.191-247.

9 高田知波「「戦前」文学としての「戦後」文学――徳冨蘆花『不如帰』への一視点――」(『社会文学』(9), 1995.7), pp.13-28.

10 高橋修「同時代的な想像力と〈終り〉――徳冨蘆花『不如帰』――」『主題としての〈終り〉――文学の構想力――』(新曜社, 2012), pp.90-110.

そうとした関も、「常套の悲劇」が回避された新しい様式（メロドラマ）に相応しい終わりと捉え、〈終り〉の議論へと接近する[11]。先行論の観点は様々であるが、浪子の死で終わらずに、浪子の墓前で義理の父と息子とがホモソーシャルな結束を遂げるという点に、様式の転換、日清・日露戦争、家族制度などの同時代の問題との連関が解き明かされてきた。

しかし、〈終り〉の重要性が浮き彫りになる一方で、原作における場の創出および受容の問題が見落とされているのではなかろうか。この〈終り〉に対して、原作読者や原作と同時代に制作された演劇作品群の観客の『不如帰』の受容を解きほぐす手掛かりとなるのは、〈始まり〉に置かれた「伊香保」である。原作以後、『不如帰』演劇の定型となる柳川春葉脚本発表まで、多くの演劇の序幕が「伊香保」に与えられていた[12]。原作の構成は、上編（19）、中編（24）、下編（29）の全72節であるが、演劇化に伴い縮約の必要性を迫られるなか、温泉を舞台とする冒頭の場は多くの場合採用され、再構成された[13]。先行論では、演劇化作品において「メロドラマの見どころ」となる「海岸の場」と、「哀切感をたたえ」、「浄化」を導く結末部の浪子の墓前に焦点化されてきたが、こうした演劇化の過程を見てもわかるように、多くの脚本において「伊香保」に一定の重要性が与えられていることは無視できない。すなわち、〈始まり〉の「伊香保」が、そうした〈終り〉に落とし込まれる場であると同時に、受容者に強力なイメージを共有する場であったことを見逃すことはできないのではないか。

原作冒頭の「伊香保」を引き継いだ演劇作品群の「伊香保」の再構成において興味深いのは、原作のように千明の宿よりもその近郊での「蕨」採集が前景化する傾向にあることだ。春を象徴する「蕨」は、原作において、実家で継母との関係を軸に精神的に窮屈な思いをしてきた浪子に武男との結婚によって春が訪れることを仄めかすものでもある。演劇においては、原作冒頭の「伊香保」の「蕨」の場面が焦点化され、夫婦の幸福の訪れが視覚化されていたのだ。さらに、演劇に限らず「伊香保」を題材とするエッセイ集にも伊

11 関，前掲書.

12 資料1 定型化までの演劇作品における伊香保

	上演開始年月	場所	幕数（脚色者、上演一座名）	「伊香保」の登場する幕
①	1901.2	大阪朝日座	六幕十二場 （並木萍水脚色、高田実一座）	序幕（二）道灌山蕨採りの場
②	1903.4	本郷座	八幕十六場 （岩崎蕣花脚色、藤澤浅二郎一座）	序幕 伊香保温泉宿千明、仝山中蕨狩
③	1904.9	東京座	七幕十四場（竹柴晋吉脚色）	一幕 伊香保千明店の場、川嶋主従蕨狩の場、木暮弐階座敷の場
④	1905.5	本郷座	八幕十一場	序幕 伊香保山中蕨狩
⑤	1905.9	大阪朝日座	五幕十場（畠山古瓶脚色）	第一 伊香保近郊採蕨
⑥	1905.9	大阪弁天座	七幕十四場（前年東京座の再演）	第一 伊香保近郊採蕨
⑦	1908.4	本郷座	七幕九場（柳川春葉脚色）	序幕 伊香保郊外採蕨

13 『不如帰』の『国民新聞』（民友社）への初出連載と、1900年1月に民友社から発表された単行本の間の異同については、既に関が指摘するように（関，前掲書，pp.100-101）、それぞれの表現媒体に応じた変化はあるが、冒頭の「伊香保」において大きな変更点はない。

香保の場と『不如帰』とが連携し夫婦の幸福を強調する演出は垣間見られるものだった(3節にて詳述)。こうした後世に紡ぎ出された作品中においても強く表象される「伊香保」の〈幸福さ〉をいかに読むべきだろうか。

〈幸福さ〉のコードを読み解くためには、まず原作の冒頭、「伊香保」という場へと目を向け、それが登場した明治30年代の時代性に留意しながら分析を進める必要があるだろう。明治30年代は、産業資本主義が発展し、国家のネットワーク化、中央集権化が進む時代であり、文学においては浪漫主義から自然主義へと転回する時代である。しかし、このように多層的な問題を抱え込んでいたために、十分に検討しつくされているとは言えない時代でもある[14]。だからこそ、その流動的で多重的な時代相と、「温泉」という現実的にも虚構的にも存在する一つの場をかかわらせながら、『不如帰』原作のテクストを読み直すことには意義があると考えられる[15]。

そこで本稿では、まず、産業資本主義やツーリズムの発展によって物理的な場への移動が以前より大幅に改善する明治30年代において、『不如帰』が言葉としての「温泉」という場をいかに表象しているのかを考察する。続いて、『不如帰』という文学の言説が実際の温泉領域に働きかけ意味性を帯びていることを確認する。そのうえで、原作において創出された場の連鎖と受容が、現在にも共有される「温泉」イメージへと接続することを明らかにする。

なお、本稿では、温泉(「伊香保」)という場を、湧き出る「温泉」そのものとしてばかりでなく、温泉のある宿および、その宿を拠点として遊興可能な広範な領域、連関する表象まで含みこんだ空間ないし場(トポス)として捉える。

2 温泉の近代的規範と「伊香保」の幸福

まず本節では、「メロドラマ」という枠組みに着目し、「伊香保」の歴史的文脈に照らし合わせながら「伊香保」の〈幸福さ〉のコードを分析する。前節でも触れたように、関肇

14 小森編，前掲書，鬼頭七美『「家庭小説」と読者たち――ジャンル形成・メディア・ジェンダー――』(翰林書房，2013).

15 文学を読み解くための一つの手段として「温泉」という観点を導入した研究は、僅かながらこれまで幾らか行われてきている。小森陽一は、江戸以来の「色欲」ではなく、「近代的な「恋愛」を生み出す場」、病と関わり「死」のイメージが喚起される場として明治文学の温泉場を捉えた(小森陽一「特集温泉郷めぐり　想像力の源泉　近代文学の中の温泉」[『Front』3(5)，リバーフロント整備センター，1991.2])。岡村民夫は、宮沢賢治の生涯と花巻温泉の関りを作品と関連付けて考察し、「温泉文化に育まれた想像力の発露」としての新たな賢治文学の位置づけを提示した(岡村民夫『イーハトーブ温泉学』[みすず書房，2008])。近年の議論においては、温泉を舞台にすることによる作者の作家的戦略や意識に言及するような作家論的なアプローチが為されている(岡村民夫「夏目漱石の明治三十九年」『論集温泉学Ⅲ』[岩田書院，2013]，李明喜「〈温泉場〉に託した物語」同前)。これらはいずれも本稿に示唆を与えてくれるものだが、作家論にのみ依拠した場合、作家がその場を選出するという事態が成立する根本的な条件を明らかにすることができないのではなかろうか。その場あるいは言葉が流通する可能性の条件に踏み込むために本稿は、テクストの「温泉」イメージの創出と連鎖の問題にフォーカスし、先行論において共通に見出された「想像力」の源泉たる「温泉」の有り様を見直してみたい。

は、『不如帰』の「メロドラマ」としての枠組みに着目した。その議論を引き継ぐ瀬崎の議論において重視されたのは、劇的な場面を構成する海辺(逗子)だった[16]。ピーター・ブルックスは、フランス革命後の社会で台頭したプチブルの欲望が家族関係を通じて表出されるのが「メロドラマ」であり、その中には社会秩序や支配社会から抑圧されたものが浮かび上がると述べた。その時代性と明治30年代の類似性を見出す関は、善と悪、美徳と悪徳、無垢な人と悪人というマニ教的な二項対立を形成する「メロドラマ」概念を導入し[17]、『不如帰』の対比的構造を読み解く。確かに『不如帰』には登場人物の善悪が分かりやすい対比の構造があるのみならず、浪子との離縁をめぐって武男の母(お慶)と武男が争うことから、家族間での新思想と旧思想の二元論的な対立と葛藤が描かれている。冒頭伊香保千明で、「三階の障子を開きて」、山歩きに出かけた夫武男の帰りを待っている浪子の姿と、物語の中盤で、遠洋航海に行った夫の帰りを待ち、結核となって療養する逗子で夫の帰りを待つ姿は対比され、伊香保と逗子という二つの空間はその構造のなかにすっぽりはまっている。さらに瀬崎は、浪子の転地療養先であり、結核の悲劇が浮き彫りになる「海岸」を「この物語の主要な舞台」であるとした。それ以前にも、浪子と武男の海辺の別れの場面は名場面と見做される傾向にあったが[18]、「メロドラマ」という観点からもその点が改めて保証されたといえるだろう。

しかしながら、だからといって不穏な空気感のなかで読者に激しい感情移入をもたらし、「哀切感をたたえる」逗子ばかりが物語を下支えしているとは言い難い。関や瀬崎のように、ブルックスの「メロドラマ」概念に寄り添うとすれば、メロドラマが、現状の社会的な秩序の「確認と修復」を提示すると同時に、それに抗う亀裂を内在させる両義

---

16 関や瀬崎ばかりではなく、浪子の「結核」という設定に注目する先行研究は多くある。柄谷行人は、「上品で、繊細で、感受性豊かなことの指標」と結核を見做す「ロマンティック」な「イデオロギー」を普及させたものとして『不如帰』を分析している(柄谷行人『定本 日本近代文学の起源』[岩波書店, 2011], pp.139-164)。福田眞人も同様に『不如帰』のこうした要素に注目し、『不如帰』が、結核療養地の逗子や、伊香保、東京青山、京都といった「流行のリゾート地」を取り込んで、「ロマンティックなイメージを率先して創造した」とする(福田眞人『結核という文化』[中央公論社, 2001], pp.161-185)。

17 ピーター・ブルックスは、フランスのメロドラマ演劇の物語と様式のテクニックを明らかにし、その物語や様式上のテクニックの様々なパターンを19世紀の小説家たちがいかにして活用したのかを解き明かした(Peter Brooks, *The Melodramatic Imagination：Balzac, Henry James, Melodrama, and the Mode of Excess*[Yale University Press, 1976], ピーター・ブルックス『メロドラマ的想像力』[四方田犬彦・木村慧子訳, 産業図書, 2002])。ブルックスによれば、「メロドラマ」は、神の秩序への信仰から離反して「道徳的神秘」に関心を抱くようになった近代的感性のモードである。映画研究において、「メロドラマ」とはある特定の時代(1930-40年代)に創作されたある特定のジャンルを示す言葉であったが、ブルックスの演劇と文学に関するメロドラマの議論が取り込まれ、より柔軟な術語として論じられるようになっている(Linda Williams, "Melodrama Revised"[*Refiguring American Film Genres：History and Theory*, ed by Nick Browne. University of California Press, 1998])。映画研究者のクレスティン・グレッドヒルのように、ブルックスから手掛かりを得た関は、「メロドラマ」をジャンルではなくモードとして捉えている。

18 浪子と武男の別れの場面は、『不如帰』における名場面とされ(越智治雄「『不如帰』劇の成立」[『文学論集3 鏡花と戯曲』砂子屋書房, 1987.6], pp.131-149)、「家庭小説」と言われる明治30年代に流行した女性向けの通俗的な小説群においては、『不如帰』の「海辺にての物語」が反復された(藤井, 前掲書, 石川巧「〈教科書〉としての家庭小説――草村北星『浜子』考」[『敍説』小山書店, 1994.7], pp.77-87)。藤井は、明治30年代から昭和20年代を「不如帰の時代」と位置づけ、「海辺の悲劇」が〈自然〉の救済と死への誘いという二つの要素で構成されているとした。

性を持つとする点を改めて捉え直す必要がある。また、そのなかに単純なコントラストがあることだけなく、相対立するような要素がいかに接近し合い、浸食されながらも、併存しているのかを読み解かねばならない[19]。〈始まり〉の場である新婚旅行の幸福な時空間を築く温泉の装いに着目することは、既存の解釈における『不如帰』のメロドラマ性を更新することにもなるはずだ。

したがって本節と次節では、一見〈幸福さ〉を築く温泉が、原作において、いかなる空間として提出され、その後にいかに記憶のなかで回帰され、いかにして幸福を内包する空間として印象付けられることとなったのかを明らかにする。それを通して、「伊香保」という場の反復による、浪子のメロドラマ的な悲劇の創造への寄与について考察したい。

まず本節では浪子と武男が実際に訪れている「伊香保」の場面に着目しよう。『不如帰』の温泉の場面は、上編一の一から一の三、二、三の一から三の三における浪子と武男の新婚旅行のなかに置かれている。上編一の一から一の三までは、「上州伊香保千明の三階」がフォーカスされ、二では一に登場した武男と浪子が夫婦となって伊香保に至るまでの道程が説明される。そして、三の一から三の三では、夫婦が伊香保近郊に蕨採集へと出かける場面が映し出される。ここで重要なのは、武男と浪子の夫婦の様子が、当事者自らによってではなく、それを外から眺める立場によって象られていることである。

『不如帰』の物語全体に目を向けると、浪子と武男の関係を覗き見る他者の姿は複数存在している。浪子のそばに仕え幾度も武男の記憶を召喚させる乳母の幾ばかりでなく、浪子のことを継母に「告げ口」(上編五の三)する浪子の妹駒子、姑川島未亡人を「鬼婆め」(中編十)と噂する「小間使」、山木の娘豊を「日ながの慰み」にする「家内の婢僕」(下編二の四)など、彼らの言葉や姿が溢れている。浪子が武男との間に邪魔をする「たれか」の存在を悪夢に見るように、「たれか」の言葉によって噂話のように語られるという構造を『不如帰』は有しているのだ。「第百版不如帰の巻首に」(1909)で作者蘆花は、「相州逗子」で、ある「婦人」から語り伝えられた「悲酸の事実譚」をもとに『不如帰』を書いたと明かした。「自分は電話の「線」になったまで」のことで「「浪子」が自ら読者諸君に語る」と作者が付言するように、こうした他者によって語り伝えられるというスタイルが原作にあったことは確かであるだろう。

冒頭の温泉もまた、こうしたスタイルのなかで、浪子や武男の夫婦の姿が映し出される。まず、一の一の「上州伊香保千明の三階」の場で強調されるのは、美しく儚げで人柄までもが評価される上流階級の「婦人」(浪子)の待ち姿である。ここでは、宿の室内の声は映し出されることはなく、「障子」を開く浪子の視線の先の風景が映し出される。そ

19 ブルックスによれば、「メロドラマ」というモードは、その「道徳的神秘」を明瞭に表出するものである。「道徳的神秘」とは、「形而上的なシステムではなく、むしろ聖なる神話の断片的な、聖性を奪われた遺物のたまり場」であり、「日常の状態ではわれわれから切り離されているように見える」「意味と価値の存在領域」である。その意味で、(温泉ないし海岸の)「非日常」の舞台は、まさに「メロドラマ」の「道徳的神秘」を暴き出す場だといえるだろう。

れとともに、「三階の婦人」の「痩形のすらりとしおらし」さを外側から語り出していく。さらに、一の二では浪子の言葉というより、姥(幾)の言葉で、「おやさしい」「旦那様」(武男)の様子と共に、「御苦労」や「御辛抱」の報われる「立派な」結婚が強調され、それを証明するかのように、「左手」の指には、「指環」が「燦然と照り渡る」。

> 「やあ、草臥れた、草臥れた」
> 足袋草鞋脱ぎすてて、出迎う二人にちょっと会釈しながら、廊下に上りて来し二十三四の洋服の男、提燈持ちし若い者を見返りて、
> 「いや、ご苦労、ご苦労。その花は、面倒だが、湯につけて置いてもらおうか」
> 「まあ、奇麗！」
> 「本当にま、きれいな躑躅でございますこと！旦那様、どちらでお採り遊ばしました？」
> 「奇麗だろう。そら、黄色いやつもある。葉が石楠に似とるだろう。明朝浪さんに活てもらおうと思って、折って来たんだ。……どれ、すぐ湯に入って来ようか」
> ＊
> 「本当に旦那様はお活発でいらっしゃいますこと！どうしても軍人のお方様はお違い遊ばしますねエ、奥様」
> 奥様は丁寧に畳みし外套をそっと接吻して衣桁にかけつつ、ただほほえみて無言なり。階段も轟と上る足音障子の外に絶えて、「ああ好心地！」と入り来る先刻の壮夫。
> 「おや、旦那様もうお上がり遊ばして？」
> 「男だもの。あははは」と快よく笑いながら、妻がきまり悪げに被る大縞の袷袍引かけて、「失敬」と座蒲団の上にあぐらをかき、両手に頬を撫でぬ。(上編一の三：15-16)

妻浪子の「婦人」像が炙り出された一の一、姥(幾)の言葉に託されて夫婦の間柄が描出された一の二に続き、武男が山歩きから帰ってきて夫婦が揃い、場を共にする一の三においても、浪子を「奥様」呼ばわりしたり、武男を「壮夫」と評したりする語り手によって互いに思いあい、仲睦まじい夫婦関係が映し出されている。すなわち冒頭では、当事者の内実としての幸福ではなく、他者に騙られた幸福が共有されているのだ。さらにその幸福は、以下に示すような温泉という場の二つの近代性、あるいは「伊香保」の固有性によって担保されている。

第一に着目すべきは、冒頭の温泉が、近代的な家族観を醸成する場として利用されていることである。上記の仲睦まじい夫婦の「新婚の日」の時間は、「伊香保の遊」すなわち新婚旅行のなかで紡がれる。

> 新婚の日、伊香保の遊、不動祠畔の誓い、逗子の別墅に別れし夕べ、最後に山科に相見しその日、これらは電光のごとくしだいに心に現われぬ。(下編十の二：293)

理想としての自由結婚や愛情で結びついた親子や夫婦による家庭(ホーム)の概念が浸透するなか、「新婚旅行」という旅行形態が上流階級を中心に拡充したが、温泉は当時多くその旅行地として選択される場所となっていた。実際に旅行できたのは余暇を保有する一部の上流階級であったとされるが、新聞記事や小説などのメディアを介して庶民階級にも「新婚旅行」の概念や、理想的な近代的家族観が流通する結果をもたらした。実際に上流階級の旅行地となったばかりでなく、理想的な家族の雰囲気を内包するような新聞記事や小説といったメディアに取り上げられたのが、温泉空間であった[20]。また、明治中期の日本において、こうした深い愛情で結ばれた夫婦、家族を理想とする近代的な家族観、すなわち「家庭」(ホーム)という概念は、欧米型の「ホーム」観と伝統的な「イエ」観が接合されることで成立していた。その接合は、教育勅語に「夫婦相和シ」という文言にも表れていると論じられている[21]。新婚旅行の場として描かれ、かつ仲睦まじい夫婦の姿が語りだされる『不如帰』冒頭の温泉は、近代的な国家の枠組みを下支えする家族観を醸成する場でもあったといえるのだ。

また、上代、中世、近世から男女の恋愛や女性にまつわる言説を醸成してきた伊香保の固有名を利用することでハネムーンの場は強化されてもいる。

> 上州伊香保千明の三階の障子開きて、夕景色をながむる婦人。(中略)春の日脚の西に傾きて、遠くは日光、足尾、越後境の山々、近くは、小野子、子持、赤城の峰々、(中略)雲二片蓬々然と赤城の背より浮かび出でたり。(上編一の一:11)

先にも示したように本作の一番初めに置かれる一文では、「上州」、「伊香保」、「千明」の固有名を鏤め、読者に「伊香保」の場を想起させる。それに続く文章では「赤城」などの「峰々」が描写され、「伊香保」からの眺めが肉付けされている。「古より温泉を以て名有る土地の如きは、大抵詩歌的な史蹟や絵画的風景を有してゐるのを常とする」[22]と言われるように、ここで「伊香保」は歌枕の表現技巧のように、その地名を介して共通のある風景を読者に共有させるものとして登場しているといえるだろう。

前近代の歴史的背景を踏まえるとすれば、これらの「伊香保」やそれにまつわる固有名は、美しい女性と関連のある場を想起させる場であった。たとえば、『万葉集』の東歌において、「伊香保」という地名が登場する歌が幾つかあるが[23]、それらの殆どは恋歌である[24]。また、『神道集』(7)を参考にすると[25]、伊香保地方には、有力な語部集団が存在

---

20 森津千尋「明治後期における「新婚旅行」言説についての一考察」(『宮崎公立大学人文学部紀要』24(1), 宮崎公立大学人文学部, 2017. 3), pp.197-208.

21 牟田和恵『戦略としての家族――近代日本の国民国家形成と女性――』(新曜社, 1996), 小山静子『良妻賢母という規範』(勁草書房, 2022).

22 幸田露伴「序」前掲,『伊香保みやげ』, p.8.

23 『万葉集』上では、「伊香保」、「伊香保沼」、「伊香保嶺」、「伊香保ろ」といった表記が見られる(第14巻:3409,3410,3414,3415,3421,3422,3423,3435)。なお、『万葉集』に関しては、(佐竹昭広ほか校注『新日本古典文学大系3 萬葉集(三)』[岩波書店, 2016], pp.329-338)を参照した。

し、中世にはすでに人間の権力欲や愛欲、善悪と邪悪を描く貴種流離譚、因果応報譚など美しい女性が関わる説話が語り伝えられていたことがわかる[26]。さらに、江戸中期頃には「女の湯」、「子宝の湯」として世に注目されるようになり、近世から明治期の温泉番付においても、「婦人に吉」、「子なき女人くわい人すること妙也」など女性に関する病の効能が記された[27]。

こうした女性と「伊香保」とのリンクは、近代以降にも引き継がれる。内務省衛生局『内務省衛生局雑誌』(1)-(2)(1875)には伊香保温泉の最初の分析表が示され、それをもとに温泉入浴指導を目的として出版された『伊香保入浴者心得』(1876)では、「貧血症婦人月経不順」などが適応症とされている。前近代に恋歌や女性と結びつけられた伊香保は、明治期以降、高級な温泉保養地として認知される温泉地となり変わり、新婚旅行にお誂えの場となっていった[28]。前近代の歴史性を残滓として留めながら「新婚旅行」という近代的な家族を醸成する風俗を介して新しい時代へと架橋された「伊香保」という場が『不如帰』の〈始まり〉には広がっているのである。

第二に注目すべきは、入浴の場としてだけでなく、宿の外での保養のための活動領域を含めた近代的リゾートとして、近代国家に属するに相応しい身体を養う冒頭の温泉が、帝国の理想を具現化させる場であるということだ。明治維新以後、温泉は、近代医療システムに組み込まれた一現場であった。衛生的な国家を建設するために、明治政府は近代的な医療の整備を目論み、西洋の医療制度や技術を積極的に取り入れていった。冒頭の宿の場面が置かれる伊香保温泉は、お雇い外国人として招聘されたベルツ博士によってその効能を説かれ、近代的なクアハウス建設を促された地である[29]。全国規模で

---

24 たとえば、「上野伊香保の沼に植ゑ小水葱かく恋ひむとや種求めけむ(第14巻：3415)」、「伊香保嶺に雷な鳴りそね我が上には故はなけども子らによりてそ(第14巻：3421)」などがある。

25 貴志正造訳「伊香保大明神のこと」『神道集』(東洋文庫, 1967), pp.134-145.

26 伊香保町教育委員会編『伊香保誌』(伊香保町役場, 1970), p.115.

27 十返舎一九『方言修行金草鞋』(1813-1834)においては、「それよりいかほのおんせんにいたり、木ぐれ武大夫のかたにとうりうする。このところもくさつにおとらぬはんじゃうにて、入とうのりょじんおびただしく、ことに此ゆはふじんにときゆへをんなきゃくおほくにぎやかなり」と記されている。

28 伊香保温泉では、1870年から「一地内に四ヶ所」以内とされた浴槽数の制限が廃止され、子宮病患者のために、踏み板から湯が霧状に噴き出す仕掛けも設けられていた(吾妻健三郎編『伊香保温泉略説』[吾妻健三郎, 1884], p.15)。浴客数も大きく伸びはじめ、1874年から1881年までの間で、約1.5万人から約3万人へと二倍ほどに増加している(山村順次「伊香保・鬼怒川における温泉観光集落の発展と経済的機能――温泉観光地の研究第二報――」[『地理学評論』42(5), 1969], p.298)。内務省衛生局の分析結果が「熊谷県管下鉱泉分析表及医治効用」(『内務省衛生局雑誌』(1), 1876.6)において公表された翌年ごろには、温泉を服用するため源泉を汲みに行く浴客が目立つようになる(吾妻, 前掲書, p.14)。これによると、伊香保温泉は、胃弱や貧血のほか、経久悪性僂麻質私、褸麻質性関節痛、腰痛、神経痛、「鉱毒ヨリ来ル所」の麻痺といった関節や神経の痛みやしびれ、皮膚病、また月経不調などの婦人病に効能があるとされている。1879年7月の皇太后の訪問によって、県道の整備が進んだ(吾妻, 前掲書, p.14)。また、この年の秋には、木暮八郎(伊香保の大家一四家の一人)の依頼で、『伊香保志』編纂が着手された。木暮八郎は、皇太后やベルツが滞在した楽山館の主人である。

29 ベルツは、1876年から1902年までの間、東京帝国大学医学部に所属して研究を行った。「日本近代医学の父」とも呼ばれるベルツは、温泉の探索と調査にも力を入れていた(トク・ベルツ編『ベルツの日記〈上〉』[菅沼竜太郎訳, 岩波書店, 1979])。日本の温泉状態・温泉地改善策を内務省に建白し、その建白書の内容は1880年に『日本鉱泉論』(中央衛生会訳)として翻訳出版されることになった。そのなかで、伊香保は日本

の実地調査が行われ、その結果は内務省衛生局から出版された出版物によって示された。温泉空間は、従来の湯治療養のような、経験的知見による効果ではなく、近代的で実証的な知見による効果効能が期待されるようになっていた。また、医療的側面ばかりでなく、とくに伝染病(感染症)予防のために公衆衛生的側面から都市の銭湯(公衆浴場)同様に、温泉地も取締規則にしたがい管理され、国民の健康を保持し増進するための機能を持っていたともいえる[30]。伊香保は熱海に倣い、先に紹介した鉱泉組合取締所を設け、浴医局を置くなどして近代的管理が徹底された温泉場であったのだ[31]。

『不如帰』において、この保養が、間接的に近代的な対外戦争を遂行する身体を養うものとして機能していることにも着目すべきだろう。『不如帰』のテクスト内の冒頭の時間は日清戦争を間近に控えたひと時である。外地獲得のための対外戦争に乗り出すために富国強兵に努めるなか、国民の健康増進のための公衆衛生の側面を整備し文明的な身体性を養うことは必須であった。先に引用した武男が宿に帰って入浴して以後の場面は次のように展開する。

> 栗虫のように肥えし五分刈り頭の、日にやけし顔はさながら熟せる桃のごとく、眉濃く目いきいきと、鼻下に(中略)髭は見えながら、(中略)幼な顔の残りて、ほほえまるべき男なり。(上編一の三:16)

風呂上がりの武男は、「山歩き」での汚れを落として「熟せる桃」の如く「ほほえまるべき」身体で登場する。武男は、入浴を通して、プロパガンダに結び付く桃太郎のような理想的な身体性を見せるのだ。

また、武男は「伊香保」に来て「山歩き」を行っているが、その背景をなすものとして志賀重昂の「日本風景論」の影響を受けた「登山」ブームを挙げることができるだろう。志賀の著作『日本風景論』は日清戦争の戦時体制のなかで受け容れられたナショナルな「風景」を人々の間で共有させる役目を果たしていた[32]。「榛名から相馬が嶽に上って、それから二ツ嶽に上」り山から山を渡り歩き、そうした山々の「景色」に言及する武男は、日清戦争を背景にフォーカスされる「国土」への意識がうごめいているようだ。「相馬が嶽のながめはよかったよ。(中略)一方は茫々たる平原さ、利根がはるかに流れてね。一方はいわゆる山また山さ、その上から富士がちょっぽりのぞいてるなんぞはすこぶる妙だ。」「遠洋航海なぞすると随分いい景色を見るが、しかしこんな高い山の見晴らしはま

の温泉のモデルとして紹介され、改善策が講じられている。

30 高橋陽一「明治前期の温泉と政府」『論集温泉学II湯治の文化誌』(日本温泉文化研究会編, 岩田書院, 2010), pp.143-190.

31 また、1890年には御料地を買い上げられ、御用邸が建設され、皇族の来遊地としても注目される。西洋人医師のベルツばかりでなく、皇族のお墨付きとなったことを利用し、伊香保温泉の地元のリーダー(湯本屋旅館の主人)たちは、西洋人や洋装の上流階級に人気を博する伊香保を誇示するような伊香保温泉の宣伝、振興キャンペーンに努めた(樽井由紀「温泉の効能から見た伊香保温泉の近代化――温泉番付、錦絵、温泉案内書を手がかりに――」[『観光学評論』2(2), 2014], pp.155-168)。

32 大室幹雄『志賀重昂『日本風景論』精読』(岩波書店, 2003).

た別だね。(中略)そらそこの左の方に白い壁が閃々するだろう。あれが(中略)渋川さ。それからもっとこっちの碧いリボンのようなものが利根川さ。あれが坂東太郎(中略)。それからあの、赤城の(中略)あの下の方に何だかうじゃうじゃしてるね、あれが前橋さ。」というように、武男は「山歩き」と、その山に登り「景色」を見下ろし見渡すことを疎かにしない。「山歩き」を介して、ときには「国土」を眺め視覚化し、ときには「全速力で駆け」体力を養い、そうした訓練と同時に疲弊した身体を癒す場が温泉なのである。帝国主義的な認識と身体とを養う機能も持つ娯楽的側面と、帝国主義的な身体を治癒し、清潔な身体を維持させる保養的側面を併せ持つのがこの「伊香保」という温泉空間だったのだ。

軍事政策を推し進めるためには、新たな〈生〉を産出する人口増強をはかり、兵力及び労働力を増強する必要性も生じるとすれば、この第二の点は第一の点と接続させることも可能だ。ハネムーンの温泉場とはまさしく、こうした近代的規範に支えられる子作りの場でもあったのではなかろうか。

『不如帰』は、女性病に効能があり、恋歌や、説話文学となじみ深い「伊香保」の従来のイメージを継承しながら、「新婚旅行」という近代の旅行形態によって、高貴で私的な男女の仲睦まじい関係を提出し直した。そして、「伊香保」の場では、入浴にまつわる猥褻な風俗性が一掃される一方で、心身の清潔、清浄を導くものとして入浴が機能し、帝国にとって理想的な逞しく「男」らしい身体が表出される。それを通して『不如帰』は、冒頭において近代的な規範を請け負う場としての温泉という場を巧みに利用し、その後の展開に起伏を与え悲劇を深める鍵となる幸福な時空間を紡ぎ出していたのだ。

また、ここまで見て来たように、『不如帰』では、「伊香保千明」の宿においても、「蕨」採集の場面においても、固有名を利用しながら前近代的な文語表現によって色彩豊かに風景が提示されていた。『不如帰』執筆後、蘆花の書いた『自然と人生』(1900)は、漢語表現と文語体から成る絵画的で美しい自然描写を持つという点で高く評価され、以後の文学に大きな影響を与えたとされているが、『不如帰』のなかに既にそうした「自然」に対する価値観が内包されていたのではないか。『不如帰』の温泉は、歌枕的な古典的表現の残滓と後の時代に引き継がれる「自然」的価値観の両者を内包する、明治30年代の過渡期的な両義性を秘める場であるのだ。

3 原作『不如帰』における「伊香保」の反復と浪子

ここまで、冒頭の「伊香保」が担保する夫婦の〈幸福さ〉について述べてきた。その幸福は、当事者ではない者によって、帝国の理想を付与されることによって形作られたものであったといえる。さらに、そのように構築された幸福が、当事者において内実伴わないものであった可能性を示す場面として、「蕨」採集の「伊香保」の場面があるだろ

う。三の一から三の三に展開される伊香保近郊の山中での「蕨採」の場面においては、「蕨狩」をしながら発する浪子の「わたくしこんなに楽しいことは始めて！」という発言にしたがえば、宿での仲睦まじい夫婦の幸せな時間が引き続き広がっているように思われる。しかし、ここでは格好の悪役ともいえる千々岩が登場し、一対一の夫婦の関係に邪魔が入り、浪子の複雑な心情が露呈される。すなわち、そこは、理想的な夫婦の関係性が突き崩されることを予測させる場なのだ。

それでは、それにもかかわらず、冒頭の温泉の〈幸福さ〉が担保されるのはどうしてだろうか。本節では、『不如帰』原作において、新婚旅行以後の展開のなかで、温泉がいかにして想起され、いかにして美化されていくのかについて考察する。

まず、物理的に温泉から離れて「伊香保」の記憶を捉え返そうとする作業は、遠洋航海に出た武男が浪子に宛てた手紙（上編七の一）のなかで行われる。武男は「シドニー」で、「伊香保にあり、蕨採りて慰みし」ときを想い、「先年に覚えなき感情身につきまとい」、「浪さんの姿が目さきにちらちら」としたと述べる。そして、「（女々しいと笑いたもうな）」と括弧づけを加えながら、「シドニー港内」に「ヨット」で遊ぶ多数の「夫婦、家族」の姿に「白髪の爺姥」になる頃の自分たち夫婦の行く末を重ね合わせ、自身の「夢」を語り上げる。このように、伊香保の幸福な時間は、冒頭で夫婦にとって実際の出来事として共有されるばかりでなく、武男の想像力によって再確認され、その理想的なさまを肉付けされていく。

一方で、その「夢」を語る手紙を受けた浪子の方で「伊香保」は、武男の抱くような理想的な行く末というより、「蕨とりにまいり候ところふとたれかが私どもの間に立ち入」るという「夢」とはいっても悪夢のなかで思い返される。武男にとって「伊香保」の記憶は、「千明」の宿も「蕨狩」も同時に思い返される甘美なものであるが、浪子にとって後者は千々岩が登場し不快を呈するものとしてもある。武男と浪子の「伊香保」には、実はズレが生じているのだ。しかしながら、これまで夫婦のズレや亀裂が「伊香保」の場面に見出されなかったのは、その後、浪子の千々岩との不快な思い出と悪夢は、武男や幾あるいは語り手によって修復されていくからだ。新婚旅行後に半年ぶりに浪子と実家で正月のひとときを過ごす武男は、「ああ、何だか二度蜜月遊をするようだ」（中編一の二）、「まるで極楽だね、浪さん」と問いかけ、語り手はその心持と二人の様子を次のように語り上げる。

> 実に新婚間もなく相別れて半年ぶりに再び相逢える今日この頃は、ふたたび新婚の当時を繰り返し、正月の一時に来つらん心地せらるるなりけり。
>
> 語はしばし絶えぬ。両人はうっとりとしてただ相笑めるのみ。（中編一の二：90）

この場面では、「新婚の当時」を共有しながら、黙々と互いに見つめ合い、うち笑う「両人」の姿が語り手によって照らし出されている。再び「伊香保」や「蕨狩」が取り上げられるの

は、結核という不治の病に身を窶して「逗子」で療養する浪子のもとへ武男が見舞に訪れたときである。このとき、武男を迎える幾は、「ごいっしょにこうしておりますと、昨年伊香保にいた時のような心地がいたしますでございますよ」と浪子に投げかけ、武男は「蕨狩りはどうだい、たれかさんの御足が大分重かッたっけ」、「もうすぐ蕨の時候になるね。浪さん、早くよくなッて、また蕨狩の競争しようじゃないか」(中編四の三)と浪子に呼びかける。こうして滅多に会うことができない夫婦が場を共にするとき、「新婚」の非日常的な時空間を捉え返すことで、日常の亀裂(共有できなかった時間、空間)を修復しようとするのだ。浪子が最後に「伊香保」の「過去(こしかた)」を思い出すのは、「不治の病」となり、離縁され「この病癒ゆとも、添われずば思いに死なん」と決するときであり、「逗子」の海岸においてである(下編四の四)。また、武男は浪子の墓前にたって、「新婚の日、伊香保の遊、不動祠畔の誓い、逗子の別墅に別れし夕べ、最後に山科に相見しその日」を思い出している(下編十の二)。のちに「浪子不動」と呼ばれることとなる「不動祠」は、浪子が離縁と病の不幸に見舞われるとき、浪子にとっても武男にとっても「不動祠畔の宣」とともに「新婚」の「伊香保」の記憶が宿る場として映し出されている。こうして、実家や療養の場となる「逗子」において、「伊香保」あるいは「蕨狩」が捉え直され、再編成されることを通して、理想的で甘美な夫婦のイメージが引き延ばされているのだ。

また、この一対の夫婦の運命は描き分けられている。関が浪子の「待つ」行為の反復を指摘したように、浪子とその記憶は美化され、受動的に語られるものとしてある。その有り様は、離縁され命を亡くし実際に結ばれることはないが、最終的に武男と浪子の父が浪子の墓前で親子であることを確認しあうことで永遠に夫婦関係が約束され浪子の受難に報いを与える結末にも垣間見られることだろう。浪子は、近代的な「家庭」の女性としてある一方で、家族制度に基づく「家」を支える模範的な女性としての役割をも求められる立場にある。浪子は「非日常」の私的な時空間(=「伊香保」、「逗子」)を保有することができても、義母の封建主義的な倫理観ばかりでなく、家父(武男、実父)に拘束されることから免れることはない。「伊香保」の記憶の回帰と浪子の美化の連鎖を通して、武男と義父の男同士の結束[33]に収着させるような、本作の制度的な現実を読み取ることができる。理想的な家庭道徳が封建主義的な家族主義の前に敗れるといった現実の矛盾は、温泉という場に取り繕われ、隠されているのである。

このように、『不如帰』では、「伊香保」という場が利用され、その〈幸福さ〉が冒頭で強く打ち出されるばかりでなく、物語全体において綻びを繕うために幾度も召喚される。帝国の男たちにとって意味ある死に祭り上げられる〈終わり〉と結託し、〈始まり〉の「伊香保」は帝国の男たちにとって意味ある幸福空間に祭り上げられるのだ。

先に『不如帰』の演劇化を通じて、序幕に「伊香保」が採用されるとともに、「蕨」が「伊香保」という場の幸福の訪れを強化するものとして機能したと述べた。前節と本節の分

33 イヴ・K・セジウィック『男同士の絆――イギリス文学とホモソーシャルな欲望――』上原早苗・亀沢美由紀訳(名古屋大学出版会, 2001).

析を踏まえれば、『不如帰』は、多様なジャンルにおいて豊かに派生しながら、幸福に収斂される場として温泉を構築し、和解の〈終り〉に着地させていたのだ[34]。

さらに、こうした幸福との結束によって『不如帰』の「伊香保」が、受容者たちによって立ち上げられていくという事例は、『不如帰』とは直接的に関係のない、「伊香保」の宣伝のために編まれたエッセイ集、高木角治郎編『伊香保みやげ』(1919)においても見られる。この書は、大正期に群馬県伊香保町の「伊香保鉱泉組合取締所」[35]の取次によって発行されたものである[36]。

文芸関係の著名人(41名)の「伊香保」をテーマにしたエッセイ、歌などを収録する本書は[37]、1996年に伊香保町によって、尾崎秀樹「新序」と清原正康「執筆者紹介」が付され復刻された[38]。復刻された「新序」において尾崎が「伊香保温泉の名を全国にひろめたのは徳冨蘆花の長篇「不如帰」だ」としたうえで、蘆花の伊香保との関わりの経歴をつぶさに拾い上げ紹介しているように、「徳冨蘆花」や『不如帰』という固有名が「伊香保」という場のPRに活用されたことは間違いない。

この『伊香保みやげ』に収録された「伊香保」での具体的な経験が綴られたエッセイのなかに、「伊香保」が『不如帰』の一場へと結び得る場として受容されていたことを知るための重要な手掛かりとなるものがある。一つは、長瀬春風「伊香保の蕨」、もう一つは、萩原朔太郎「石段上りの街」である。

長瀬春風は、「蕨とるなら伊香保の山よ　可愛いおぬしの手をひいて」という『不如帰』にまつわる小唄が流行し、「蕨の生えて居る思出多い伊香保の山に立つて居ても、おん身無くては何の幸福があらう」と若い男女が『不如帰』になぞらえて恋文を交わすといった同時代の状況を語る。さらに、実際に「伊香保」に訪問した長瀬は、浪子が武男を待つ姿に自身を重ねるかのように「障子を開」いて山々を眺め、美人の女中が帰る際に「「不如帰」の浪さん」の「必つと帰つて下さいな」という言葉を真似て「蕨の時分には必つと入らしつて下さいな」と言ってくれたことを通して、武男気分を満喫する。長瀬は『不如帰』の「伊香保」の「幸福」の受容の状況と、浪子と武男にとって「思出多」い「伊香保」の「幸福」を、自身の体験に基づいて上書きするような受容者たちの心理状況を物語る。朔太郎のエッセイでも同様に、『不如帰』に基づいて、浪子と武男の訪れた「晩春五月から初夏」に

---

34 以後、「伊香保」は、浪子と武男の幸福を象徴する「蕨」と結託していったと考えられる。たとえば、小津安二郎『秋日和』のなかで、「伊香保」の名物として「武男と浪さん」の「蕨」が紹介されている。

35 「鉱泉場組合取締所」とは、交通、衛生、風紀など鉱泉場内諸般を改良、監督するために、知事の認可を得て設置されたもので、伊香保では、1885年にベルツの指導を受けて設立された(島田斉胤『伊香保案内』(島田斉胤, 1908), pp.12-13)。知事の認可を受けるなど公的組織である一方で、東武鉄道とともに「伊香保温泉と榛名山」という鳥瞰図入りの案内書を発行していることから、戦前において旅客誘致策を講じる一組織であったと考えられる。

36 『伊香保みやげ』は1919年の初出とともに、1996年の復刻版を参照し、引用は後者にしたがった。

37 編者高木角治郎という人物の名は、『伊香保誌』という地誌で数カ所確認することができ、伊香保町の発展に貢献する一人物であったと推測できる。伊香保町教育委員会編『伊香保誌』(伊香保町役場, 1970)を参照すると、水道委員や伊香保尋常高等小学校建設委員などの役職を務めていることがわかる。

38 現在では、徳冨蘆花記念文学館(伊香保温泉在)にて販売されている。

かけての時期を「伊香保の一番いい季節」だと解釈する受容者たちの様子が示される[39]。「不如帰の女主人公を思わせるような、少し旧式な温順さをもった、どこか病身らしい細面の女たち」が、「この温泉の空気を代表する浴客」となり、朔太郎に代表される男性の浴客はその「温健」な婦人たちを見て、「不如帰の女主人公」を思い出しているのだ[40]。このように『不如帰』の受容者にとって、原作や演劇を介して偽装された「伊香保」の幸福な空間は重要な場であったといえるのだ。

『不如帰』は、「伊香保」という場の明治30年代という重層的な歴史性を利用し、冒頭のみならず、物語全体において幸福を強調して夫婦の間にある綻びを隠蔽した。原作において帝国と共犯関係を結ぶばかりでなく、原作以後においても、受容者たちが「伊香保」での「幸福」を追体験するという循環のなかに置かれることで、帝国の受容者にとって意味ある温泉空間を築き上げていたのである。

4 結び

当人ではなく浪子と武男を取り巻く人々によって〈幸福さ〉が意味づけられることで『不如帰』の「伊香保」は、夫に尽くす良妻と雄壮で逞しい良夫の幸福な空間として提出され、その〈幸福さ〉は逗子での悲歎さと対比的に示されてきた。アダプテーション作品群でもその対比が強調され、「伊香保」には、幸福や浪子の「女性性」というイメージが付きまといながら、強調されることになった。しかし、そのように「伊香保」が夫婦の幸福な空間として成立し得たのは、そこが帝国にとっての理想的な夫婦関係を担保するような近代的な新たな価値観を醸成する場であったからである。そして、その「伊香保」での幸福な記憶が物語のところどころで喚起されることによって、その理想的と思われた関係の内に生じていた綻びが隠されていく。夫婦の間にあるすれ違いを隠蔽しながら、帝国の男たちの結束による収束をもたらすために、〈始まり〉の「伊香保」が繰り返し召喚されたのだ。物語の〈終わり〉の浪子の墓前というばかりでなく、物語の〈始まり〉の「伊香保」という温泉は、帝国との間に共犯関係を結びながら、同時代の受容者の想像力を掻き立てるものであったのだ。

先行研究において、この物語の主要な舞台は、「結核を患った浪子が転地療養する逗子」すなわち「メロドラマ」においてヒロインが「受難」する「海岸」だとされてきた。しかしながら、『不如帰』において幸福な雰囲気のなかに埋没させられ立ち上がる冒頭の温泉もまた重要な意味をなしている。政治・経済あるいは文学など多方面で転換期を迎えて

39 管見の限り『伊香保みやげ』に関する研究はない。ただし、安智史が、萩原朔太郎「石段上りの街」を取り上げ分析を行っている(安智史『萩原朔太郎というメディア――ひき裂かれる近代/詩人――』[森話社, 2008], pp.221-248)。

40 このほか、「伊香保」に修学旅行に出かけた際に、『不如帰』の「浪子と武男のロマン」に「深い同情」を寄せたという話もある(生方敏郎「伊香保温泉六十年」[『温泉』27(12), 1959.12], pp.27-29)。

いた明治30年代という過渡期に『不如帰』は、「伊香保」という温泉の固有の歴史性および新旧交わる両義的な「自然」表現を巧みに利用し、「メロドラマ」の起伏を下支えする〈幸福さ〉を創出し、言葉としての温泉空間を立ち上げていたのである。現在でも温泉は、『伊香保みやげ』の「序」において幸田露伴が言うように「人を益することも大きいもの」であり、「愉快」を感じさせ、生理的かつ心理的に「好結果」を与うるものと考えられる傾向にある[41]。しかし、その幸福の内実とは、帝国の欲求充足や、帝国に共振する快楽だったといえるのではないか。『不如帰』の〈幸福さ〉を偽装する構造は、幸福をもたらすものとして温泉イメージが止めどなく膨張していくという現実へと連鎖するものであるのだ。

参考文献(Bibliography)

著作

佐竹昭広ほか校注(2016)『新日本古典文学大系3萬葉集(三)』. 東京：小学館. *Shin Nihon Koten Bungaku Taikei3 Manyô Shû*. (2016). Tokyo：Iwanami Shoten.

伊狩章(1975)『硯友社と自然主義の研究』. 東京：桜楓社. Ikari, Akira(1975) *Kenyûsha to Shizenshugi*. Tokyo：Ofu Sha.

イヴ・K・セジウィック, 上原早苗・亀沢美由紀訳(2001)『男同士の絆』. 名古屋：名古屋大学出版会. Sedgwick, Eve(2001). *Between Men：English Literature and Male Homosocial Desire* (Sanae, Uehara, & Miyuki, Kamezawa, Trans.). Nagoya：The University of Nagoya Press.

関肇(2007)『新聞小説の時代』. 東京：新曜社. Seki, Hajime(2007) *Shinbun Shôsetsu no Jidai*. Tokyo：Shinyô sha.

藤井淑禎(1990)『不如帰の時代』. 名古屋：名古屋大学出版会. Fujii, Hidetada(1990) *Hototogisu no jidai*. Nagoya：The University of Nagoya Press.

伊香保町教育委員会編(1970)『伊香保誌』. 群馬：伊香保町役場. The Board of Education of Ikaho Town(Ed.). (1970) *Ikaho Shi*. Gunma：Ikaho cho yakuba.

十返舎一九『方言修行金草鞋』(1813-1834). 江戸：錦森堂. Jippensha, Ikku. *Mudashugyô Kaneno Waraji*. Edo：Kinshindô.

高木角治郎編(1919, 1996)『伊香保みやげ』. 東京：伊香保書院. Takagi, Kadojirô(Ed.).(1919, 1996) *Ikaho Miyage*. Tokyo：Ikaho shoin.

牟田和恵(1996)『戦略としての家族』. 東京：新曜社. Muta, Kazue(1996) *Sennyaku tositeno Kazoku*. Tokyo：Sinyô Sha.

瀬崎圭二(2013)『海辺の恋と日本人』. 東京：青弓社. Sezaki, Keiji(2013) *Umibe no Koi to Nihonjin*. Tokyo：Seikû Sha.

吾妻健三郎編(1884)『伊香保温泉略説』. 東京：吾妻健三郎. Azuma, Kenzaburô(Ed.).(1884). *Ikaho Onsen Ryakusetsu*.

柄谷行人(2011)『定本 日本近代文学の起源』. 東京：岩波書店. Karatani, Kôjin(2011) *Teihon Nihon Kindai Bungaku no Kigen*. Tokyo：Iwanami Shoten.

41 幸田, 前掲書, pp.8-9.

福田眞人(2001)『結核という文化』. 東京：中央公論社. Fukuda, Mahito(2001) *Kekkaku toiu Bunka*. Tokyo：Chûôkôron Sha.
内務省衛生局(1876)『内務省衛生局雑誌』(1). Naimushô Eiseikyoku(1876) *Naimushô Eiseikyoku zassi*.(1).
鬼頭七美(2013)『「家庭小説」と読者たち』. 東京：翰林書房. Kitô, Nami(2013) *Katei Shôsetsu to Dokushatachi*. Tokyo：Kanrin Shobô.
島田斉胤(1908)『伊香保案内』. Shimada, Naritane(1908) *Ikaho Annai*.
高橋修(2012)『主題としての〈終り〉』. 東京：新曜社. Takahashi, Osamu(2012) *Shudai tositeno Owari*. Tokyo：Shinyô Sha.
ピーター・ブルックス, 四方田犬彦・木村慧子訳(2002)『メロドラマ的想像力』. 東京：産業図書. Brooks, Peter(2002) *Merodorama teki Souzouryoku*(Yomoda, Inuhiko, & Kimura, Keiko, Trans.). Sangyô Tosho.
安智史(2008)『萩原朔太郎というメディア』. 東京：森話社. Yasu, Satoshi(2008) *Hagiwara Sakutarô toiu Media*. Tokyo：Shinwa sha.
瀬沼茂樹(1969)「家庭小説の展開」『明治文学全集93 明治家庭小説集』. 東京：筑摩書房. Senuma, Shigeki(1969) Katei Shôsetsu no Tenkai. Tokyo：Chikuma shobô.
小山静子(2002)『良妻賢母という規範』. 東京：勁草書房. Koyama, Shizuko(2002) *Ryôsaikenbo toiu Kihan*. Tokyo：Keisô Shobô.
貴志正造訳(1967)「伊香保大明神のこと」『神道集』. 東京：東洋文庫. Kishi, Shôzô, Trans. (1967) Ikaho Daimyôjin no Koto, *Shintô Shû*. Tokyo：Tôyô Bunko.
岡村民夫(2008)『イーハトーブ温泉学』. 東京：みすず書房. Okamura, Tamio(2008) *Ihatov Onsengaku*. Tokyo：Misuzu shobô.
トク・ベルツ編, 菅沼竜太郎訳(1979)『ベルツの日記〈上〉』. 東京：岩波書店. Berutsu, Toku(Ed.).(1979) *Berutsu no Nikki*. Tokyo：Iwanami Shoten.
小森陽一編(1997)『メディア・表象・イデオロギー』. 東京：小沢書店. Komori, Yôichi (Ed.).(1997) *Media, Hyôshô, Ideorogî*. Tokyo：Ozawa Shoten.
Williams, Linda(1998) Melodrama Revised, *Refiguring American Film Genres：Theory and History*(Nick, Browne, Ed.). Berkeley：University of California Press.
Brooks, Peter(1976) *The Melodramatic Imagination：Balzac, Henry James, Melodrama, and the Mode of Excess*. New Haven：Yale University Press.

論文

森津千尋(2017)「明治後期における「新婚旅行」言説についての一考察」『宮崎公立大学人文学部紀要』24(1). 宮崎公立大学人文学部. Moritsu, Chihiro(2017) Meiji Kôki niokeru Sinkonryokô Gensetsu nituiteno Ichi Kôsatsu, *Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities*, 24(1), pp.197-208.
高田知波(1995)「「戦前」文学としての「戦後」文学」.『社会文学』(9). Takada, Chinami(1995) *Senzen Bungaku tositeno Sengo Bungaku*. Shakai Bungaku,(9), pp.13-28.
越智治雄(1987)「『不如帰』劇の成立」『文学論集3 鏡花と戯曲』. 東京：砂子屋書房. Ochi, Haruo(1987) *Hototogisu* Geki no Seiritsu, *Bungaku Ronshu3：Kyôka to Gikyoku*. Tokyo：Sunagoya Shobô, pp.131-149.
山村順次(1969)「伊香保・鬼怒川における温泉観光集落の発展と経済的機能」『地理学評論』42(5). Ymamura, Junji(1969) Ikaho Kinugawa niokeru Onsen Kankô Shûraku no hatten to Kezaiteki Kinou, *Chirigaku hyôron*,42(5), pp.295-313.
李明喜(2013)「〈温泉場〉に託した物語」『論集温泉学Ⅲ』. 東京：岩田書院. Lee, Myeong-hee(2013) Onsenba ni Takushita Monogatari, *Ronshu Onsengaku3*. Tokyo：Iwata shoin, pp.199-238.
石川巧(1994)「〈教科書〉としての家庭小説」『敍説』. Takumi, Ishikawa(1994) Kyoukasho toshiteno Katei Shôsetsu, *Josetsu*, pp.77-87.
岡村民夫(2013)「夏目漱石の明治三十九年」『論集温泉学Ⅲ』. 東京：岩田書院. Okamura, Tamio(2013) Natsume

Soseki no Meiji39 nen, *Ronshu Onsengaku3*. Tokyo：Iwata shoin, pp.155-197.
生方敏郎(1959)「伊香保温泉六十年」『温泉』27(1). 東京：日本温泉協会. Ubukata, Toshirô(1959) Ikaho Onsen Rokujûnen, *Onsen*, 27(1). Tokyo：Nihon Onsen Kyoukai, pp.27-29.
小森陽一(1991)「想像力の源泉 近代文学の中の温泉」『Front』3(5). 東京：リバーフロント整備センター. Komori, Yôichi(1991) Sôzôryoku no Gensen Kindai Bungaku no nakano Onsen, *Front*, 3(5). Tokyo：Japan RiverFront research Center, pp.28-31.
高橋陽一(2010)「明治前期の温泉と政府」日本温泉文化研究会編『論集温泉学Ⅱ湯治の文化誌』.東京：岩田書院. Takahashi, Yôichi(2010) Meiji Zenki no Onsen to Seihu, *Ronshu Onsengaku2*. Tokyo：Iwata shoin, pp.143-190.
山本芳明(1995)「ディスクールの世紀末〈父〉の肖像」『国文学 解釈と教材の研究』40(11).学燈社. Yamamoto, Yoshiaki(1995) Disukûru no Seikimatsu Chichi no syôzô, *Kokubungaku：Kaishaku to Kyouzai no Kenkyû*, 40(11), Gakutô Sha, pp.42-49.
樽井由紀(2014)「温泉の効能から見た伊香保温泉の近代化」『観光学評論』2(2). Tarui, Yuki(2014) Onsen no Kônô kara mita Ikaho Onsen no Kindaika, *Kankogaku Hyôron,2(2)*, pp.155-168.